**ストーリーライン**

　主人公：ひよりは幼い頃から人の輪に居ることが好きだった。

　多くの人と笑い合い、分かち合う。

　そんな日常の一コマに幸せを感じていた彼女を大きく変えるきっかけになったのは、小学校を卒業した年の冬に開催された、とあるアイドルの路上ライブだった。

　とうか―始めはたった一人の観客が見る見るうちに大観衆へと変わっていく光景は、ひよりの心に衝撃を与え『アイドル』への関心を強く持たせることになる。

「わたしも、あんな風にたくさんの人から笑顔をもらいたいですっ」

　ひよりは如月とうかに憧れ、彼女の通うステラアカデミーへの編入を決意する。

　編入試験までの数か月間、アイドルとはなにかについて自分なりに勉強したひより。ネット配信されている有名なアイドルのライブ映像などから独学で歌い方、ダンスの練習をするも人様に見せられるような出来にはならなかった。

　迎えた試験当日、ステラアカデミーの校門をくぐり抜けたひよりを待っていたのは憧れていた光景だった。

きちんと区画分けされた街並み、立ち並ぶ店の数々。まるでヨーロッパの旧市街にでも来たかのような感動を覚えた。

ふらふらと、あちこちを見て回るひよりは道中にとんでもない美人を見つける。自分と同じくらいの年齢。しかし先輩か後輩か分からず、去っていく背中を見つめていると案内役の教師が引率を目的にやって来る。

教師の後を追って噴水広場を通り、ひよりは遠目からだった学園の姿を間近で見て感動する。

『憧れの如月とうかさんに会えるかもしれませんっ』

　浮足立つひよりだが、如月とうかに会うにはまず試験を通過しなければ話にならないと気合を入れなおす。

　筆記を終え、ひよりは面接を受ける準備を整えていた。

『えっと、わたしがステラアカデミーに編入したい理由はっ、えぇと―』

　緊張で入れなおした気合も動転するなか、前の面接者が退室して出てくる。青い髪の綺麗な女の子。

　見とれていると自分の名を呼ばれ、ひよりは面接へと向かう。

　結果から言えば、最悪の気分だった。

　編入したいと思うワケ、自分の長所と短所。余すことなく言えたと思っていたが面接官の顔はどれも厳しかったのだ。

『落ちたかもしれません……』

　とぼとぼ荷物を纏めて帰るひより。

　沈んだ気持ちのまま校舎を後に、噴水広場の方へと歩いていると何やら綺麗な歌声が届いてくる。

　興味を惹かれ、歩を進めた先に居たのは―青髪の女の子。

　ひよりの前に面接を受けていた子が、噴水の縁に腰かけ天を仰ぐように歌っていた。

　透き通るようなクリスタルボイス。

　歌い終えた青髪の女の子に、夢中で拍手を送るひより。

「すごいですっ、思わず聞きほれてしまいました！」

　青髪の女の子はひよりを一瞥すると、嫌な場面でも見られてしまったかのような苦い顔をする。

「あ、あの！　お名前を聞いても良いですかっ」

「……雪白ちふゆ」

「ちふゆさんですね！　わたしはひよりって言いますっ」

「あっそ」

　夕陽に照らされる、対照的な二人の影。

　これが、後にトップアイドルに名を連ねる二人の最初の出会いだった―。